

## 研究活動報告 子育て支援プログラム

著者	岩本 沙那佳, 新道 賢一, 南野 美穂
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	15
ページ	101-107
発行年	2014-02-28
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00002777">http://doi.org/10.14990/00002777</a>

## 子育て支援プログラム

### 一 はじめに

本稿では、甲南大学人間科学研究所、および、甲南大学心理臨床カウンセリングルームとの共同で開催された、子育て支援プログラムについての活動報告を行う。

子育て支援プログラムは、前述の通り、人間科学研究所とカウンセリングルームが共同で行っている「臨床心理学の知見を活かした子育て支援」の実践活動である。同プログラムは、平成十三（二〇〇一）年から開始され、現在（二〇一三年十二月末日）まで、のべ約七八〇〇名の親子が利用した実績がある。人間科学研究所、およびカウンセリングルームにとっては、大きな社会貢献の場であると言えるだろう。

一方、このプログラムは、子育て支援の実際を学ぶ大学院生の貴重な研修機会の場としても活用されてきた歴史がある。このプログラムにスタッフとして参加した大学院生が修了後、地域の発達相談や幼稚園の相談業務などの親子の支援に携わるということも少なからずあった。さらに二〇一一年度からは、大

学院の修了生がスタッフに加わり大学院生の指導にあたるようにもなった。これは、本プログラムに課せられた「臨床心理学を学ぶ大学院生が、地域援助の研修を積む機会としてのシステムを構築すること」という当初の目的のひとつを達成した証左でもある。

今年度は、一連の子育て支援プログラムについて、「縮小しながら実施予定」という方針が出されたこと、またこれまで子育て支援プログラムを一手に引き受け開催してきた担当者が退職し、別の相談員三名に引き継がれたこともあり、例年になく波乱に富んだプログラムとなったのではないかと思う。

今年度は担当者ごとに、各プログラムの報告を行う。なお、子育て支援プログラムについて、「縮小しながら実施予定」という方針により、「子育てサークルまっほっくり&プレイグループどんぐり」のフォロワーアップグループ「まつの木くらぶ」は開催されなかったため、報告はない。そのため、「親子相談」、「うりぼうくらぶ」、「子育てサークルまっほっくり&プレイグループどんぐり」の三つのグループについての報告となる。

### 二 うりぼうくらぶ

「うりぼうくらぶ」は、就園前の子どもと保護者を対象に毎月第二・四火曜日の十一時から十二時半の時間帯に行っている。

事前に申込をした親子が、甲南大学の一室に母子ともに集まる。時に、父親が参加することもある。スタッフは、保育士と筆者、修了生や大学院生である。各回は、保育士による設定遊びの時間と自由遊びの時間から構成されている。設定遊びは、「うりぼうくらぶ」の歌から始まり、出席をとる（子どもは名前を呼ばれたら返事をして保育士がもつタンバリンを鳴らしに行く）、絵本の読み聞かせ、親子でできる手遊びやふれあい遊びに加え、毎回異なるメインの活動が含まれる。保育士は異年齢の子どもが参加できるように配慮し、家庭ではなかなか体験できないダイナミックな運動や、「うりぼうくらぶ」での活動をきっかけに家庭でも親子で楽しめる季節感のある制作などを取り入れている。自由遊びの時間は、スタッフが子どもの自主性を尊重しながらかかわったり、親が日頃抱えている悩みをスタッフに話す場合もある。また、保護者同士が交流をする場にもなっている。

### 三 親子相談

「親子相談」は、就学前の子どもと保護者を対象に行っている個別相談である。毎月二回第一・三火曜日の十時半から十二時の午前中に設定している。担当者が親子それぞれにつき、親子同室で行うため、親子関係や親や子どもが担当者への関わりなどをその場で観察でき、多くの情報を得ることができる。主

な相談内容は、子どもの発達や子どもへの関わり方についてであった。担当者は必要に応じて、子どもの発達検査を実施したり、保護者に別のグループを紹介する場合もある。今年度は、再来の親子や後に報告する「まつぼっくり・どんぐり」の参加者が親子相談につながったケースもあった。

### 四 子育てサークルまつぼっくり&プレイグループ

#### どんぐり

「子育てサークルまつぼっくり&プレイグループどんぐり」は就学前の子どもとその親を対象とし、親と子がそれぞれグループに分かれて行う活動である。全五回の活動を一クールとし、年間二クール行う。参加者は各クールごとに募集し、固定したメンバーで一クール活動する。

当初の予定では、このプログラムは、今年度前期、第二十二期をもって終了となる予定であった。しかし、参加者からの強い要望により、今年度後期も開催されることとなった。前期と後期で担当者が代わったため、前後期を別々に報告する。

#### 四一 二〇一三年度前期(第二十二期)

第二十二期は、四名の親と二名の子どもが参加した。参加者は全員が前年度以前から継続して参加している方であった。スタッフは、カウンセリングルームの相談員一名が子育てサーク

ルまっつぱっくりのファシリテーターを勤め、修了生で本活動の経験者三名と後期博士課程の大学院生一名が交代でプレイグルーブどんぐりのスタッフを勤めた。第二十二の活動は以下のようなものであった。

#### 子育てサークルまっつぱっくり プログラム

第一回…「トークでリフレッシュ」 子育ての困りごとや、

子どもの成長を感じる瞬間など、子育ての悲喜こもごもを共有した。

第二回…「子育て講話」 本学名誉教授の松尾恒子先生に親子のスキンシップの大切さについてお話をうかがった。

第三回…「自分を再発見！体験ワーク」 本学修了生の甲斐暁子先生がファシリテーターとなり、母としての自分、社会人としての自分を振り返るワークを体験した。

第四回…「子育て講話パートⅡ」 本学名誉教授の松尾恒子先生に親として努力していることを聞いていただき、子育ての困り事を相談した。

第五回…「まっつぱっくりの想い出作り」 まっつぱっくりでの体験をシェアする意味で文集づくりをした。

子育て講話では「情報をもらっただけでなく、整理しながらお話を聞くのが自分自身の安心につながる」、自分再発見ワークでは「案外幸せな今かもしれないと気づいた」、等の感想があった。当初は正しい子育ての答えを求めて参加されたが、活動を通じて、子育てに正解はないと気づいていかれたようである。また、仲間やゲストの先生方との安心できる関係の中で自分の気持ちを適切に開放し、共感しあい、エンパワーされることを大切にできるようになっていかれたのではないかと感じている。

#### プレイグルーブどんぐり

スタッフが一對一で子どもを見守りながら過ごした。母子分離がスムーズだった子どもが途中で親とはなれることに不安を見せることがあったが、親は「子どもが素直に甘えられるようになった」と、望ましい変化と受け止めていた。逆に、母子分離の際にひどく混乱して親を困らせた子どもが、涙をためながらも親にバイバイし、いたずらをしたり、他の子とかかわろうとしたり、とその場を楽しむようになった。「スタッフが子どもへの気持ちに寄り添って臨機応変に対応してくれることがありたい」と感想をいただいた。子どもの変化の意味を一緒に考えようとするスタッフへの親の信頼は厚い。

本活動は、予算が打ち切りになったこと、また、プレイグルーブどんぐりの主要スタッフである院生を、参加する子どもと同

数確保することが難しくなったことで、今年度前期での終了を予定していた。しかし、回を重ねるごとに、参加者から「継続して欲しい」、「こんな活動がなくなるのはもったいない」との声があがったことで、継続可能性について検討することとなった。

#### 四一二二〇一三年度後期(第二十三期)

前節でも述べた通り、子育てサークルまつぼっくり&プレイグループぽんぐりの継続を望む参加者の声は、第二十二期の開催中から上がっていた。終了後も、何とかして継続してほしいという声は、担当者や本プログラム開始当初からかわってこられた松尾恒子先生の元にも寄せられた。最終的には、主催元であるカウンセリングルームのルーム長・富樫公一先生のところに要望書が届けられるに至った。そのため、ルーム長の判断の下、予算を使わないという条件での継続が認められることとなった。講師料が支払えないということで、学外の先生には事情を斟酌していただき、ボランティアでの出講をお願いすることとなった。また、これまでになかった試みとして、学内の先生にも講師の依頼を行った。

以上のような経緯で第二十三期が行われ、五名の親と三名の子どもが参加した。まつぼっくりのスタッフは、後述のプログラムの通りとなり、一方、ぽんぐりのスタッフは、カウンセリ

ングルームのルーム相談員一名、修了生で本活動の経験者二名がすべての回に参加し、修士課程の大学院生二名がここに加わった。

子育てサークルまつぼっくりの内容は以下の通りである。

#### 子育てサークルまつぼっくり プログラム

第一回…「子育て講話①」本学名誉教授の松尾恒子先生を囲み、参加者の感じている子育てについての課題や悩みを語り合いながら、解決策を探る試みが行われた。

第二回…「体験ワーク」本学修了生の甲斐暁子先生がファシリテーターとなってグループワークを行い、参加者各自の感じ方、考え方、伝え方の癖を知り、互いに共有し、自らのあり方を振り返った。

第三回…「茶道体験」…本学学生相談室の友久茂子先生に出講していただき、十八号館グループワーク室を使って、茶道の体験を行った。これは、新しい試みであったが、「ゆつたりとした素敵な時間を過ごせた」などの感想が寄せられ好評であった。

第四回…「ディスカッション・父親を『育てる』には」今期の担当者である新道がこれまで甲南大学人間科学研究所で行ってきた父親の子育てに関する調査、また学外で行ってきた父親への子育て支援の知見を元に

現代の父親事情について話し、各家庭のさまざまな事情や制約を勘案した上で、いかに夫婦で子育てを行うかについての議論がくり広げられた。

第五回・「子育て講話②」松尾恒子先生に再度出講していただき、子育てについての尽きない悩みについて話し合われることとなった。

全五回のプログラムを通じて参加者から、子育ての悩みなどについて相談する場であると同時に、参加者同士が当事者として悩みなどを共有し、互いに励まし合い、力を得る場となっているという感想が寄せられた。また、このプログラムに参加することが、自らの子育てを振り返る場となり、漫然と続く子育てに区切りをつけることができているという声も聞かれた。子どもと離れて、子育てについて考え、話し合う場というのは、当事者である母親にとっては貴重な時間となっているようである。

子育てサークルまっほっくり&プレイグループどんぐりが縮小しながら最終的に打ち切られる予定であることについては、今回の参加者全員から何とか継続してもらえないかと切望された。他にこのような子育てで支援の場がないことが大きな要因である。また、長くこのプログラムに参加している方からは、本プログラムがなければ現在の自分の子育てではなかったという旨

の声も聞かれた。

一方、プレイグループどんぐりでは、これまでと同様に、当初母親との分離直後から泣いていた子どもが、回を経るごとに泣く時間が短くなり、他児やスタッフに関心を向け、一緒に遊びはじめたりするようになるなど、興味深い変化がみられた。

今回、参加していた子どもたちの年齢は〇歳八ヶ月から三歳以下で、いずれもまだ保育所や幼稚園など日常的に長時間保護者と離れた経験の少ない子どもばかりであった。そのため、母親と一時間半離れることは非常に不安の高まる事態であるだろう。ここに臨床心理士の専門性を生かした見守り方とかかわり方で接することに、子どもたちは徐々に場への安心感を得て、周囲に興味を示し、楽しそうに過ごす時間を持つことができるようになる。このような体験は、子どもたちにとっては、他では得がたいものであろうし、子どもたちが今後世界を広げていく上で大きな礎となるものであると思われる。

子どもたちがプレイグループどんぐりの場で楽しそうに過ごす時間が増えることを、これまでのスタッフは「たくましくなる」と表現していたのは印象的である。この場で得た「たくまし」さは、子どもを預ける母親にとっても、子どもを頼もしく思えるようになるであろうし、プログラム自体への信頼にもつながるものであるだろう。

しかしながら、スタッフが一對一で子どもを見守ることが難しくなってきたと言わざるを得ない点が今期の課題であった。まず、これまでプレイグループどんぐりの活動の中心を担っていた大学院生のスタッフの確保が事実上ほとんど不可能となつてしまった。そのため、今回この活動を支えたのは、ルーム相談員と大学院終了生が中心であった。この点は、今後への大きな課題として残されている。

大学院生が臨床心理士の訓練の過程で、言葉でのかかわりがまだ不安定で十全でない子どもと出会い、いかに言葉以外の部分も含めて子どもとかわり、子どもに安心できる状況を提供するかということを体験しておくことは、非常に大切なことではないかと考える。言葉を用いなければ臨床心理士の専門性は発揮できないのか。決してそのようなことはないはずである。母親と離れたことによる不安によつて泣く子どもと一緒に時間を過ごすのは決して心穏やかなものではないが、そこで何ができるのか考え、こどもとかわることは決して無駄ではない。また、大学院終了直後、資格を得るか得ないかの頃、多くの終了生が経験するのは、乳幼児健診の職場である。プレイグループどんぐりの活動は、そのような現場に入る前に、実際の乳幼児の様子を、かかわりを通してながら学ぶことができる貴重な場である。このような絶好の研修機会をみすみす逃してしまうのは、勿体ないような気がしてならない。

以上のように、一度は打ち切りの憂き目に遭いながらも、参加者の強い要望により復活を遂げた子育てサークルまつぼっくり&プレイグループどんぐりであるが、ひとまず来年度も開催の見込みは立つに至っている。初めて、担当者としてこの活動に関与することになった筆者としても、この点は喜ばしいことであると感じている。この活動を続けた方がよいと思うのは、参加者が述べている通り、他ではあまりなされていない子育て支援の試みであるという点である。このような試みができるのは、大学という研究機関ならではの特色であろう。

また、この活動が、子育て支援にはよりきめの細かいニーズがあることを気づかせてくれたという点も見逃せない。参加者によると、親子でなされる子育て支援はあるけれども、それは突き詰めると子ども中心のものであつて、子育てをしている母親のしんどさ、やりにくさ、苦しさなどに焦点を当てたものではない、という。確かに、母親同士が子育ての悩みや困りごとについて、ある程度プライバシーが守られた空間で、語り合い、共有し合う場というのは、貴重なかもしれない。

しかし、前述の通り、プレイグループどんぐりのスタッフの確保という大きな問題を抱えていることも事実である。参加者の要望、十年以上も地域で活動を行ってきた歴史もあるので、是非とも活動を続けていきたいと考える所存である。

## 五 おわりに

以上、今年度の子育て支援プログラムについての報告を行った。

来年度は、本プログラムの実施予算が大幅に削られての実施となることが決定している。しかし、甲南大学の子育て支援の歴史を途切れさせないように何とかやり過ごしていきたいと考えている。

(岩本 沙耶佳・新道 賢一・南野 美穂)